中古語における意志系 Yes/No 疑問文の表現機能
―日本語歴史コーパス平安時代編を利用して―

林　淳子（東京大学大学院人文社会系研究科）[1]

Functions of Intention-expressing Yes-No Interrogative Sentences in Early Middle Japanese.

Hayashi Junko (Graduate School, the University of Tokyo)

要旨

本発表は、現代日本語の「シヨウカ」疑問文による質問（「そろそろ行こうか？」「荷物持ちましょうか？」など）の特殊性への関心から、中古語において話し手の意志あるいは相手の意志をめぐる Yes/No 疑問文がどのような表現として存在していたかを明らかにすることを目的とする。そこで、日本語歴史コーパス平安時代編を利用し、中古語において意志を表すのに用いられる助動詞「ム」「マシ」と疑問の係助詞「ヤ」「カ」との組み合わせからなる 8 文型の疑問文を対象に調査を行った。その上で、各文型の意志系 Yes/No 疑問文については、前後文脈を参考に各例の表現機能を判断した。その結果、8 文型の中でも特に意志系 Yes/No 疑問文の例が多く見られる「…ムヤ」「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」について、現代語のシヨウカ疑問文とは異なる範囲へ表現機能が広がることが分かった。

1.　はじめに

1.1　現代日本語シヨウカ疑問文による質問の特殊性

現代日本語の Yes/No 疑問文のうち、文末が「シヨウカ／シマショウカ」の形式をとるものを、本発表ではシヨウカ疑問文と呼ぶ。シヨウカ疑問文は話し手の意志や相手の意志をめぐる疑問を表す文であり[2]、具体的には次のような表現に用いられる。

■意志をめぐる躊躇感の表明　「行こうか？やめておこうか？」
■申し出　「その荷物、持とうか？」
■相談　（BBQ をしながら）「このお肉、もう裏返そうか？」
■誘い　（デートの帰り道）「次は映画を見に行こうか？」
■共同行為のもちかけ　（一緒に出かける相手に）「そろそろ行こうか？」
■提案　「待ち合わせは 8 時にしようか？」
■行為の誘導　「黙ってないで、そろそろ話そうか？」

意志をめぐる躊躇感の表明・申し出・相談は話し手の意志、誘い・共同行為のもちかけ・提案は話し手と相手の意志、行為の誘導は相手の意志をめぐる疑問文により実現される表

---

[1] jhayashi52[at]gmail.com　※[at]を@に置き換えてください。

[2]「明日こそは晴れようか？」のように推量系のシヨウカ疑問文も存在するが、意志系の「シヨウカ」と推量系の「ダロウカ」（「明日こそは晴れるだろうか？」）との棲み分けが進んだ結果、現在ではほとんど用いられなくなっている。

現である。

これらは、意志をめぐる躊躇感の表明を除けばすべて対人的な質問の表現でもあるが、ショウカ疑問文による質問は、「～デスカ？」「～マスカ？」「～ノデスカ？」など他の文末形式をとる Yes/No 疑問文の質問と異なり、厳密な意味での解答を求めているとは言えない（林(2014b)）。上記の例から明らかなように、ショウカ疑問文は、疑問の内実が事態実現にまつわる相手の意向が分からないというところにあり、質問によって求める答えが話し手の事態実現意向に対する相手の意向（応じるか否か）である点で特殊なのである[3]。

1.2　発表の目的

現代日本語ショウカ疑問文による質問の特殊性は、ショウカ疑問文が話し手や相手の意志をめぐる Yes/No 疑問文であることから自然に導かれるものであろうか。意志をめぐる Yes/No 疑問文は通時的に見ていつでも、話し手の意向に対して相手から応諾の意向を求めるという特殊な表現であり続けてきたのか。本発表は、このような問題関心から、意志をめぐる Yes/No 疑問文（以下、「意志系 Yes/No 疑問文」と呼ぶ）の中古語における表現機能を確認することを目的とする。

結論を先に述べれば、中古語における意志系 Yes/No 疑問文の表現機能は、現代語のそれとは相当に異なるものであり、中古語の状況から現代語における意志系 Yes/No 疑問文の表現機能の成立過程を探ることはできない。しかし、資料が韻文に偏る上代語を除けば、疑問文の表現機能を確認することが可能な最も古い時代である中古語の様相を確認しておくことは、意志系 Yes/No 疑問文の表現機能のありうる広がりを把握する上でも必要であろう。

1.3　方法

表１　検索対象の文型と検索方法

文型		検索方法	
係り結び	「～カ…ム」「～ヤ…ム」 「～カ…マシ」「～ヤ…マシ」	キー設定	語彙素が「む」／「まし」
		前方共起条件	キーから 10 語以内 語彙素が「か」／「や」
承接	「…ムカ」「…ムヤ」 「…マシカ」「…マシヤ」	キー設定	語彙素が「む」／「まし」
		後方共起条件	キーから 1 語 語彙素が「か」／「や」

具体的な方法としては、日本語歴史コーパス平安時代編を利用して意志系 Yes/No 疑問文の用例を検索し[4]、小学館『新編日本古典文学全集』の本文を参考に各用例の表現機能を確認するという手順を踏んだ。意志を表すのに用いられる助動詞「ム」「マシ」[5]と疑問の係助詞「ヤ」「カ」が、係り結びあるいは承接によって連動してはたらく文を中古語の意志系

[3] この違いを反映して、ショウカ疑問文による質問とその他の文型の疑問文による質問では、終助詞＜ね＞＜な＞の付加に伴う表現機能の変化の様相が異なる（林(2014a)）。

[4] 国立国語研究所（2014）『日本語歴史コーパス　平安時代編』https://maro.ninjal.ac.jp（2015 年 6 月 12 日確認）

[5] ただし、平叙文で話し手の意志を表す用法を持つ「ム」と異なり、「マシ」は疑問文の述語に用いられたときにのみ、意志を表す（川村(2014)）。

Yes/No 疑問文とみなし、表 1 に挙げる 8 つの文型を検索対象とした。

係り結び文型を検索する際に前方共起条件を「キーから 10 語以内」と設定したのは、これが設定しうる最も広い範囲であったためである。したがって、助詞「ヤ」「カ」と助動詞「ム」「マシ」の係り結びによって構成される疑問文であっても、両者が 11 語以上離れている例は検索結果に含まれないという点で、この検索方法には限界がある。しかし、本発表の目的は中古語における意志系 Yes/No 疑問文の表現機能の広がりを確認することであり、11 語以上離れて係り結びを構成する文があったとしても、結果に大きな影響を与えるものではないと判断した。

2.　中古語の意志系 Yes/No 疑問文

2.1　意志系 Yes/No 疑問文の文型

上記の方法で検索を行った結果、8 つの文型で合わせて 1,692 例を得た。この 1,692 例を Yes/No 疑問文と Wh 疑問文に分けた上で、Yes/No 疑問文についてはさらに、述語「～ム」「～マシ」が推量系（推量、妥当性、可能性など）の意を表すものと意志系の意を表すものに分けた。表 2 にそれぞれの例数を挙げる（「呼応なし」は 10 語以内に共起した係助詞「ヤ」「カ」と助動詞「ム」「マシ」が係り結びを構成していないことを指す）。

表 2　文型別の例数

	Yes/No 疑問文		Wh 疑問文	呼応なし	その他	合計
	推量系	意志系				
～カ…ム	6	3	658	27	1	695
～ヤ…ム	549	18	10	91	2	670
…ムカ	3	0	0		0	3
…ムヤ	121	54	0		5	180
～カ…マシ	0	0	25	6	0	31
～ヤ…マシ	22	53	0	8	0	83
…マシカ	0	0	0		0	0
…マシヤ	25	5	0		0	30

一定数の意志系 Yes/No 疑問文が見られるのは「～ヤ…ム」「…ムヤ」「～ヤ…マシ」の 3 文型においてである。そこで、以下ではこの 3 つの文型の意志系 Yes/No 疑問文がどのような表現機能を持つかを見ていく。

2.2　意志系 Yes/No 疑問文の表現機能

2.2.1　本文種別

意志系 Yes/No 疑問文「～ヤ…ム」「…ムヤ」「～ヤ…マシ」が現れる本文の種別[6]は表 3 の通りである。

---

[6] 日本語歴史コーパス平安時代編の検索結果に本文種別が記載されていない例については、発表者が調査・判断した。また、検索結果においては本文種別が「会話」となっている例の中でも、会話のなかで「～しようかと思って、…した」のように語られる思考内容である場合には、「心内語」と判断した。

表 3　本文種別

	会話	歌	心内語	その他	合計
～ヤ…ム	1	16	0	1	18
…ムヤ	51	1	2	0	54
～ヤ…マシ	7	13	33	0	53

「～ヤ…ム」は歌、「…ムヤ」は会話、「～ヤ…マシ」は心内語と、よく現れる文種を棲み分けている様子が伺える。そこで、まずは現代語シヨウカ疑問文と同様に会話で多用される「…ムヤ」の表現機能から見ていきたい。

2.2.2　「…ムヤ」

「…ムヤ」文型の意志系 Yes/No 疑問文には、「…ム」の形で表される行為の主体すなわち主語が 1 人称（話し手）であるものと 2 人称（相手）であるものとがある。古典文法において「「…ム」は意志を表す」と言うときの「意志」は通常話し手の意志を指す（小田(2007)）ため、2 人称者が主語である「…ムヤ」疑問文の「…ム」を厳密な意味で「意志」とは言うことはできないかもしれない。しかしながら、

- 「…ム」が話し手の意志を表すという前提は、平叙文を基準にしたものである。
- 現代日本語では、平叙文と異なり、事態を述べきるわけではない疑問文においては、相手の心の内（意志もこれに含まれる）を話し手が言語化してしまう場面がある（林(2015)）。

の 2 点を考慮し、疑問文を考察する本発表では 2 人称主語であっても意志系 Yes/No 疑問文であると考えたい[7]。その上で「…ムヤ」の表現機能別例数を一覧にすれば次のようである。

表 4　「…ムヤ」の表現機能別例数

主語	表現機能		例数
1 人称	対人的	宣言（意志表明）	4
		反語による意志不在表明	6
	非対人的	意志をめぐる躊躇感表明	2
2 人称	実現意向伺い		13
	依頼		23
	勧め		4
	誘い		2

A　1 人称主語

1 人称主語の意志系 Yes/No 疑問文のもっとも基本的な表現機能は、自らの意志をめぐる躊躇感表明である。しかし、「…ムヤ」疑問文の場合は、意志をめぐる躊躇感表明は非対人的な場面でしか見られず、対人的な表明の場面では躊躇感がほとんど感じられない単なる意志表明か、あるいは自らその意志の存在を否定する反語しかない。

[7] 野村(2014)は、「ム」の用法として「⑥意志」とは別に「⑧聞き手の意志」を挙げ、「…ムヤ」疑問文をその例としている。

■宣言（対人的意志表明）…4 例

(1)（末摘花から送られた元日の装束について源氏が）「とり隠さむや。かかるわざは人のするものにやあらむ」　（源氏物語 1 末摘花　p.301[8]）

■反語による意志不在表明…6 例

(2)（浮気しないよう忠告されて）少将、「あなゆゆし、よし、聞きたまへ。文をだにものしはべりてむや。『御用意あり』とうけたまはりしよりなむ、限りなく頼みきこえし」とのたまひて、　（落窪物語　p.180）

■非対人的・意志をめぐる躊躇感表明…2 例

(3) 容貌（かたち）はしもいと心につきて、つらき人の慰めにも、見るわざしてんやと思ふ。　（源氏物語 3 少女　p.64）

B　2 人称主語

一方、2 人称主語の意志系 Yes/No 疑問文の表現機能は、基本的には事態実現に関する相手の意向を伺うことであり、「…ムヤ」疑問文にもこれに当たる例が多い。

■実現意向伺い…13 例

(4) むかし、女をぬすみてゆく道に、水のある所にて、「飲まむや」と問ふに、うなづきければ、　（伊勢物語　p.217）

相手の意向伺いである「…ムヤ」疑問文の中でも、特に話し手がその事態の実現を希望している場面では、依頼・勧め・誘いの表現となる。すなわち、話し手の受益を前提としていれば「依頼」、話し手の受益を前提としない場合のうち、聞き手のみが行う行為についての実現意向を問うのが「勧め」、話し手自身も行おうとしている行為について相手の実現意向を問うのが「誘い」である[9]。

■依頼…23 例

(5)（弁の少将が中納言邸の女房に対して）『我いと思ふさまにおはすなるを、必ず、御文つたへてむや』とのたまひしかば、　（落窪物語　p.91）

■勧め…4 例

(6) 主の侍従は、故大臣に似たてまつりたまへるにや、かやうの方は後れて、盃のみすすむれば、「寿詞をだにせんや」と辱められて、竹河を同じ声に出だして、まだ若けれどをかしううたふ。　（源氏物語 5 竹河　p.72）

■誘い…2 例

(7)（僧都が妹の尼君に、源氏への挨拶に誘う場面）「この世にののしりたまふ光る源氏、かかるついでに見たてまつりたまはんや[10]。世を棄てたる法師の心地にも、いみじう世の愁へ忘れ、齢のぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえん」　（源氏物語 1 若紫　p.209）

---

[8] 巻数・頁数は小学館『新編日本古典文学全集』による。ただし、古今和歌集には頁数ではなく、歌番号を記す。

[9] 勧めと誘いのこのような区別は、小田(2015)（p.222）に従うものである。

[10] 述語が尊敬語「～たまふ」であることから、主語は 2 人称である。この点で、同じ「誘い」といっても、1 人称複数主語である現代語の誘い（「次は映画を見に行こうか？」）とは異なる。

このように、依頼の例が多いことから、「…ムヤ」を「…ム」と一括して「「～む」型の行為指示表現」と見る先行研究（藤原(2014)など）もある。藤原(2014)では「…ムヤ」の「ヤ」は命令形の文末に接続する「ヤ」と同様に「行為のうながしとして用いられる」と説明する。しかし、(4)のように相手の意志の有無をたずねる例がある以上、やはり「…ムヤ」の「ヤ」は疑問の助詞と見るべきである。小柳(2014)の述べる通り、依頼表現が確立していない時代には「「～むや」という相手の意向を尋ねる疑問表現を使って」「間接的に要求」していたと見る方が適切であろう。

また、そもそも川上(2005)のように、この種の「…ムヤ」を「推量＋疑問」と見る研究もあるが、依頼だけならともかく、勧めや誘いの例も存在することを考慮すればやはり、意志をめぐる疑問と見るべきであろう。

2.2.3　「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」

「…ムヤ」が 1 人称者（話し手）の意志をめぐる疑問を表す場合もあれば 2 人称者（相手）の事態実現に対する意向をたずねる場合もあったのに対し、「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」が扱うのは、1 人称者の意志に限られる。また、「…ムヤ」疑問文は対人的表現がほとんどであったのに対し、「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」はともに、非対人的すなわち独り言的に話し手の意志あるいは意志をめぐる躊躇感を表明する表現が多い。「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」の表現機能別例数は表 5 の通りである。

表 5　「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」の表現機能別例数

主語	表現機能			～ヤ…ム	～ヤ…マシ
1 人称	対人的	宣言（意志表明）		4	1
		申し出	意志をめぐる躊躇感表明	0	1
		提案		1	1
	非対人的	意志表明		6	1
		躊躇感表明		6	49
	その他			1	0
合計				18	53

A　1 人称主語・非対人的

■意志表明…「～ヤ…ム」6 例・「～ヤ…マシ」1 例

(8) 三千歳になるてふ桃の花ざかり折りてやかざさむ君がたぐひに（落窪物語　p.271）

(9) ともかくも御覧ずる世にや思ひ定めましと思しよるには、（源氏物語 5 宿木　p.377）

■意志をめぐる躊躇感の表明…「～ヤ…ム」6 例・「～ヤ…マシ」49 例

(10) （ちゃんとした衣装を持たない母北の方が）すくよかなる衣のなきぞいといとほしき。「隠しの方にやあらむ」とのたまふ。（落窪物語　p.324）

(11) （源氏が末摘花の琴の音を聞きながら）ものや言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。（源氏物語 1 末摘花　p.269）

中心的な表現機能である「非対人的な、意志をめぐる躊躇感表明」において、「～ヤ…ム」

と「～ヤ…マシ」には次の 2 点の違いが認められる[11]。

①扱う事態の重大さ・躊躇の度合い

「～ヤ…ム」: 身近な単発の動作を行うか否かを問題にする。軽い迷い。

(12)（ちゃんとした衣装を持たない母北の方が）すくよかなる衣のなきぞいといとほしき。「隠しの方にやあらむ」とのたまふ。　（(10)再掲）（落窪物語 p.324）

(13) 散るをまたこきや散らさむ袖ひろげひろひやとめむ山の紅葉を　（平中物語　p.512）

「～ヤ…マシ」: 今後の方針として何を選ぶかを問題にする。深い逡巡。

(14)（源氏が玉鬘への恋情を抑えられなくなり）わが御心にも、すくよかに親がりはつまじき御心や添ふらむ、父大臣にも知らせやしてましなど、思しよるをりをりもあり、　（源氏物語 3 胡蝶　p.174）

(15)（明石の君が姫君を引き取るべきか思案する）いかにせまし、迎へやせまし、と思し乱る。　（源氏物語 2 松風　p.424）

したがって、次の 2 例のように同じ「言ふ」という行為でも、「～ヤ…ム」と「～ヤ…マシ」では事態の重大さが異なる。

(16) 世の中にいづらわが身のありてなしあはれとや言はむあな憂とや言はむ　（古今和歌集 943）

(17) この男、苦しうなりて、かういへるとて、げに、たち返り来ぬべきことをやいはましと思へど、　（平中物語　p.528）

②「ツ」「ヌ」の参加による意味合いの違い

助動詞「ツ」「ヌ」が「～ヤ…ム」の「ム」に上接する例はあまり見られないのに対し、「～ヤ…マシ」の「マシ」には「ツ」「ヌ」がしばしば上接する。

表 6　「ツ」「ヌ」が上接する用例の数

	ム／マシ	テム／テマシ	ナム／ナマシ	その他	合計
～ヤ…ム	17	1	2	0	20
～ヤ…マシ	29	10	13	1	53

この内、「～ヤ…テマシ」「～ヤ…ナマシ」は用いられる場面状況に一定の傾向が見られる[12]。「～ヤ…テマシ」は、好機のついでに、一見大胆に見える方向へ舵を切ろうとする前向きな方針転換に伴う躊躇感表明の場面で用いられる。

(18)（玉鬘の裳着の機会に、内大臣に玉鬘引き取りの経緯を説明しようと思案する）まして、内大臣にも、やがてこのついでにや知らせたてまつりてましと思しよれば、いとめでたうところせきまでなむ。　（源氏物語 3 行幸　p.295）

「～ヤ…ナマシ」は、状況の悪さに投げやりな気持ちになり、これまで続けてきたことを終

[11] 「ム」と「マシ」の違いについて、山口(1968)は「非事実性をそなえた意味領域の中で、「まし」の領域はより非現実的であり、「む」の領域はより現実的である」と述べている。また、高山(2002)は連体ナリとの承接関係の有無を根拠に「マシは〈非現実〉面だけに関与し、ムは〈現実〉〈非現実〉の両面に関与する」と論じている。

[12] 意志系 Yes/No 疑問文において「ツ」「ヌ」の上接がもたらすニュアンスの違いについては、岡崎(1996)の「…ムヤ」「…テムヤ」「…ナムヤ」に見られる違いの分析がある。

えてしまおうとする後ろ向きの方針転換に伴う躊躇感表明の場面で用いられる。

(19)（六条御息所が娘とともに伊勢に下ろうかと思案する）大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。（源氏物語 2 葵　p.18）

B　1 人称主語・対人的

「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」には、少数ながら、話し手の意志あるいは意志をめぐる躊躇感を対人的に表明するものもある。

■宣言（対人的・意志表明）…「～ヤ…ム」4 例・「～ヤ…マシ」1 例

(20) 今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや見む　（古今和歌集 737）

(21) 折すぎてさてもこそやめさみだれて今宵あやめの根をやかけまし（和泉式部日記 p.26）

■申し出（対人的・意志をめぐる躊躇感表明）…「～ヤ…ム」0 例・「～ヤ…マシ」1 例

(22) かくのみしゆくへまどはばわが魂をたぐへやせまし道のしるべに（平中物語　p.495）

■提案（対人的・意志をめぐる躊躇感表明）…「～ヤ…ム」1 例・「～ヤ…マシ」1 例

(23) ふみわけてさらにやとはむもみぢ葉のふりかくしてし道と見ながら（古今和歌集 288）

(24) 片岡にわらびもえずはたづねつつ心やりにや若菜つまましし　（大和物語 p.310）

対人的といっても、これらはすべて、問答歌や文のやりとりの中で詠まれた歌であり、前後の歌との関係から臨時的に、話し手の意志表明が宣言に、意志をめぐる躊躇感表明が申し出や提案に解されるに過ぎない。すべて歌の例であることを考えれば、文自体の表現機能を申し出や提案と言うことはできないであろう。しかし一方で、現代語ショウカ疑問文のように 1 人称主語の意志系 Yes/No 疑問文が申し出や相談のような相手の意向をたずねる質問になる可能性自体は、中古語の意志系 Yes/No 疑問文にも潜在していたと言えよう。

3.　現代語ショウカ疑問文との比較

現代語の「ショウ」が古代語の「セム」の現代的な姿であるとはいっても、「セム」から「ショウ」に至る間にこの形式の性質は当然変質している（尾上(2012)）。係助詞「ヤ」と現代語の終助詞「カ」も同様であろう（阪倉(1993)）。しかし、それぞれの時代に「…ムヤ」「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」および「ショウカ」が意志をめぐる Yes/No 疑問文の文型であったことを重視し、あえて両者を比較検討すれば、表 7 のようになる（△は限定的に存在することを示す）。

表 7　各文型の表現機能

主語		1 人称				1 人称複数	2 人称
		対人的		非対人的			
		宣言	躊躇感表明	意志表明	躊躇感表明		
中古語	…ムヤ	○	×	×	○	×	○
	～ヤ…ム	△	△	○	○	×	×
	～ヤ…マシ	△	△	△	○	×	×
現代語	ショウカ	×	○	×	○	○	△

表 7 から明らかなように、意志をめぐる躊躇感を非対人的に表明する機能は時代や文型の別を問わず見られるが、その他の点では相違点が多く、そこから現代語ショウカ疑問文の特殊性を考えるにあたって問うべき問題が見えてくる。

①中古語の意志系 Yes/No 疑問文は、表現機能の傾向に基づいて「…ムヤ」タイプと「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」タイプに分けることができる。「ヤ」の位置の違いによってこの差が生まれるとすれば、文末で疑問の意を添える「ヤ」[13]と文中で係り結びを構成する「ヤ」とでは疑問のあり方が異なると見ることができる。

⇒現代語ショウカ疑問文は冒頭に挙げた通り幅広い表現機能を有するが、「ショウカ」の「カ」はすべて同じようにはたらいていると言えるのか。

②意志系 Yes/No 疑問文の文型はすべて係助詞「カ」ではなく「ヤ」によって構成されるものであることから、「ヤ」による疑問のあり方と意志をめぐる疑問文に何らかの関係があったと見ることができる[14]。

⇒現代語ショウカ疑問文の文末の助詞「カ」は何をどのように疑問することにはたらいているのか。

③中古語「…ムヤ」には 2 人称主語の例が多いのに対し、現代語ショウカ疑問文では 2 人称主語の例は相手の行為を誘導する場合（「黙ってないで、そろそろ話そうか？」）に限られる。現代語では、2 人称主語の意志系 Yes/No 疑問文は「スルカ／シマスカ」や否定疑問文が担う。

(25)「これ、食べますか？」＜実現意向伺い＞

(26)「お塩取ってくれますか？」＜依頼＞

(27)「良かったら、いらっしゃいませんか？」＜誘い＞

⇒「ショウカ」「スルカ」の機能分担はいつから発生したのか。現代語でも限定的に「黙ってないで、そろそろ話そうか？」のような 2 人称主語の例があるのはなぜか。

④現代語ショウカ疑問文には 1 人称複数主語のものが多く見られるが、中古語の意志系 Yes/No 疑問文には、1 人称複数を主語とするものは存在しない。

⇒1 人称複数主語の意志系 Yes/No 疑問文はいつ頃から見られるのか。

4. まとめ

本発表では、中古語の意志系 Yes/No 疑問文として「…ムヤ」「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」の 3 つの文型の疑問文に注目し、日本語歴史コーパス平安時代編を利用して、各文型の表現機能の広がりを調査した結果、以下の考察を得た。

・中古語の意志系 Yes/No 疑問文は、現代語ショウカ疑問文と同じく話し手の意志をめぐる躊躇感表明の機能を有する。

・しかし一方で、現代語ショウカ疑問文にはほとんど見られない 2 人称主語の例が「…ム

---

[13] 阪倉(1993)によれば、文末に「ヤ」を添える「―ヤ。」タイプの疑問文は、「文の叙述が終止形でいちおう完了したところに「や」を添えて、これをそのまま相手に持ちかけるかたちをとる」疑問文であり、それゆえに鎌倉時代以降、「問いかけ」の語気が薄れ、反語など情意的な方向へ傾くという。

[14] これに関連して、野村(2001)の「ヤによる問い掛けは価値的」であり、「真偽性とは直接関わらない」という指摘は、上代語に関するものであるとはいえ、本稿で論じた意志系 Yes/No 疑問文と「ヤ」の関係を考える上で示唆に富む。

ヤ」疑問文には多く見られ、現代語シヨウカ疑問文の大部分を占める 1 人称複数主語の例が見られないなど、両者の違いも認められる。

この結果を通して、意志系 Yes/No 疑問文が持ちうる表現機能の広がりを確認するとともに、中古語と現代語ではその広がりが重なりつつ異なることが明らかになった。

この考察を踏まえ、今後は、意志系 Yes/No 疑問文が現代語特有の表現機能を持つに至る過程を調査・分析していきたい。

参考文献

岡崎正継(1996)『国語助詞論攷』おうふう.

小田勝(2007)『古代日本語文法』おうふう.

小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院.

尾上圭介(2012)「不変化助動詞とは何か―叙法論と主観表現要素論の分岐点―」『国語と国文学』89 巻 3 号，pp.3-18.

川上徳明(2005)『命令・勧誘表現の体系的研究』おうふう.

川村大(2014)「マシ」日本語文法学会編『日本語文法事典』，pp.587-588.

小柳智一(2014)「奈良時代の配慮表現」野田尚史、高山善行、小林隆『日本語の配慮表現の多様性―歴史的変化と地理的・社会的変異』，pp.57-74.

阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店.

高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房.

野田尚史、高山善行、小林隆(2014)『日本語の配慮表現の多様性―歴史的変化と地理的・社会的変異』くろしお出版.

野村剛史(2001)「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』，70 巻 1 号，pp.1-34.

野村剛史(2014)「ム」日本語文法学会編『日本語文法事典』，pp.601-602.

林淳子(2014a)「疑問文における終助詞＜ね＞と＜な＞」『日本語学論集』，10 号，pp.152-167.（http://hdl.handle.net/2261/55750 よりダウンロード可能）

林淳子(2014b)「「返事をさせる表現」の全体像―解答要求表現の位置づけを求めて―」『日本語文法学会第 15 回大会予稿集』，pp141-148.

林淳子(2015)「Yes/No ノ無し疑問文と代弁的質問」『日本語学会 2015 年度春季大会予稿集』，pp.41-48.

藤原浩史(2014)「平安・鎌倉時代の依頼・禁止表現に見られる配慮表現」野田尚史、高山善行、小林隆『日本語の配慮表現の多様性―歴史的変化と地理的・社会的変異』，pp.75-92.

山口堯二(1968)「「まし」の意味領域」『国語国文』，37 巻 5 号，pp.21-35.

山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院.